

フレゲの sens と dénotation の 定義をめぐって

藤 田 康 子

は じ め に

言葉が用いられるとき、記号 (signe) と言語外的な対象 (objet) とがどのような対応関係におかれているか、なぜ言語が言語外的の対象について語れるのかは、フレゲ (Frege) をはじめとして多くの哲学者、言語学者によって繰り返して議論されてきた問題である。

「宵の明星」といっても、「明けの明星」といっても、「金星」といっても、同じ対象について 語ることができるのはなぜか。記号に 意味しかないとしたら、この問いには答えることができない。逆に、これらの表現は同じ対象を指示しているのにもかかわらず、コンテキストによっては使えない場合があるのはなぜか。記号に指示の機能しかないのであれば、説明できないであろう。そこで、記号には、記号と対象を対応させる役割と、意味を表わす役割とがあることを指摘し、記号の意味 (《sens》) と記号が指示している対象 (《dénotation》) を峻別したのがフレゲであった。

dénotation の問題は、Russell や Strawson によっても定表現 (descriptions définies) に関して展開され、さらには、Ducrot が、やはり定表現の指示 (référence) に関して、存在前提 (présupposition existentielle) の角度から検討を加えている。この他、Searle が指示を言語行為 (Speech acts) の一つとして位置づけている他、Quine, Lyons, Milner らの研究、個有名詞の指示の問題を扱った Klipke らの研究など、指示の問題は哲学、言語学上の重要なテーマとし

て、さまざまな角度から考察が重ねられてきた。

そこで、本論稿は、これらの研究の発端となったフレゲの dénotation の定義を明らかにすることを目的とする。扱った論文は以下のとおりである。Frege, G., 《Sens et dénotation》 dans *Ecrits logiques et philosophiques*, Seuil, 1971.

I. sens と dénotation の区別の必要性

《a》, 《b》という二つの記号が、 $a = b$ という等価 (égalité) の関係にあるとする。フレゲの考察は、まず a と b がどういう意味において等しいのかを問うことから始まる。

《l'étoile du matin》と《l'étoile du soir》という表現について考えてみよう。この両者の間に等価の関係が成り立つのは、どちらの表現も同じ金星という対象が対応しているからである。すなわち、 $a = b$ という関係は、おのおのの記号が指示している対象が同じであることを示しているのである。

ところが、前者は朝見える金星であるのに対し、後者は夕方見える金星のことである。つまり、意味の上からは、この二つの表現は等しいとは言えない。したがって、《a》, 《b》という記号は、指示対象は同じであっても、意味は異なることがわかる。

このように、記号の指示対象 (dénotation) と意味 (sens) を区別する必要があることをフレゲは指摘した。

ただ、指示対象と意味を区別する必要は、大部分の記号におこることであるが、例外がないわけではない。一つには、意味に対応する指示対象がない場合があげられる。フレゲはこのような場合にあてはまる例として次の例をあげている。

- 1) 《le corps céleste le plus éloigné de la terre》
- 2) 《la suite qui converge le moins rapidement》

また、たいていの場合、言葉は指示対象について語るために用いられるが、

まま語の意味そのものについて語る場合がある。たとえば直接話法、間接話法における引用語がそうである。引用された語はもはや通常の言語外の指示対象をもたず、他者が用いた語の意味そのものを指示対象にする。

フレゲのいわんとすることを、例を補って考えてみよう。「彼の読んだ本は面白かったそうだ」という言表において、「本」という語は言語外の対象すなわち実在するある本を指示しているわけではなく、第三者が話者に話した語の意味を伝えているにすぎない。話者は実際にどの本のことなのか知っていようがいまいが関係ない。第三者の語ったことが「本」という意味をもつことが表わされているのである。

II. 命題の sens と dénotation

II-1. 命題の dénotation とは何か——推論

さて、単語あるいは語群に関しては、これまでみてきたように、sens と dénotation の両面から分析を加える必要が認められたが、命題に関してはどうかあろうか。

フレゲはまず、命題 (proposition) に dénotation があるのかどうか、あるとすればどのようなものかということから考察を進めていく。

次の命題について考えてみよう。

3) 《Ulysse fut déposé sur le sol d'Ithaque dans un profond sommeil》

フレゲによれば、《Ulysse》という名詞は、実在の人物を指示しないから dénotation をもたない。このような名詞を含む命題は、当然意味はあっても指示対象 (dénotation) はないと思われるが、その意味のみが問題にされる限り、指示対象があろうとなかろうと、なんら支障はない。

ところが、Ulysse が実在する人物で、命題の内容が実際におこったこと、あるいはおこらなかったことだと思いついていただろうだろうか。

命題の内容が現実世界において実際におこった、あるいはおこらなかったと

言えるということは、言いかえれば命題が真であるか偽であるか決められるということである。ところで、この命題の真偽価値は、言語内事象としての意味には示されない。とすれば、指示対象に求めればいいのではないかと考えられる。以上の考察から、命題が指示する対象があるとすれば、それは意味に対応する言語外事実があるかどうか、すなわち命題が真であるか偽であるかという真偽価値に他ならないとするフレゲの推論が導かれるわけである。

《Nous sommes donc conduits à identifier la *valeur de vérité* d'une proposition avec sa *dénotation*. Par *valeur de vérité* d'une proposition, j'entends le fait qu'elle est vraie ou fausse.》¹⁾

すなわち、フレゲのいう命題の指示対象は、名詞の指示対象と違い、意味に対応する言語外的対象そのもの——たとえば Ulysse が地面に横たえられたという実際のでき事——ではない。

II-2. 推論の検証

フレゲは、語や語句だけでなく、命題にも指示対象があり、それは真偽価値のことだという推論を立てたわけであるが、次のこの推論の検証に取り組む。

II-2-1. 検証（1）

「命題は真偽価値を指示する」というフレゲの定義はあくまで推論に過ぎないわけであるが、フレゲはこの推論を裏付ける証拠の一つとして、次の点をあげている。

命題の一部分の表現を、意味の異なる別の表現におきかえても、その指示対象が同じである限り、命題の指示対象も変わらないはずである。ところで、命題の一部の表現を変えても、その指示対象が同一である限り、命題の真偽価値は変わらない。ゆえに、命題は真偽価値を指示するという仮説は成り立つ。

例を補ってみよう。たとえば、《l'étoile du matin est un corps illuminé par le soleil》という命題において、《l'étoile du matin》を《l'étoile du soir》におきかえても、命題の真偽価値は真のまま変わらない。したがって、命題の真偽価値を命題の指示対象だと想定することに無理はないというわけである。

II-2-2. 検証 (2)

命題の一部分の表現 (単語, 語群) を別の表現におきかえても, その指示対象が同じであれば命題の真偽値は変わらないことは, 上にみたとおりである。では, おきかわる方の表現が一個の命題である場合も, 同じことがいえるのであろうか。もしフレゲの仮説が正しければ, この場合も命題全体の真偽値は変わらないはずである。

そこで, フレゲは従属節の指示対象がどのようなものであるか見ていく。従属節の場合も指示対象はやはり真偽値なのだろうか。

①従属節が引用文の場合

フレゲはまず, 名詞節が引用文である場合について検討する。引用文中の語句は現実の対象ではなく, 意味を指示することは前にみたとおりである。このような語句を含む引用文の従属節は, これまでにみた命題のように真偽値を指示せず, 引用前の意味内容を指示する。フレゲの主張を次の例を補って考えてみよう。

4) 《Jean croit que Sophie veut épouser un taïtien》

引用文中の《un taïtien》は実在の人物を指示しているとはいえない。したがって, 従属節の真偽値は真とも偽とも決定できない。ゆえに, 引用部分の命題が指示しているのは Sophie がタヒチの人と結婚したがっているという意味内容 (Jean の信じていること) であって, 真偽値ではない。

上で述べたことが正しいとすれば, 従属節だけを主節から切り離して取り出しても, 命題全体の中で意味していたことと同じ意味を表わすだろうか。答えは否である。つまり, Jean にとってはタヒチの人であっても, 実際には中国人だったならば, Sophie veut épouser un taïtien とは言えなくなる。ゆえに, 意味の上からは, 従属節は主節と切り離して考えることはできず, 従属節は主節と一体になって一つの意味を表わしているのである。従属節は命題の意味の一部を表わしているにすぎない。

フレゲはこの裏付として次の点をあげている。もし、引用文である従属節の真偽価値が変わると、命題全体の真偽価値も変わるのであれば、従属節はその真偽価値を指示していると考えざるをえない。ところが実際には引用文にあたる従属節が真であろうと偽であろうと、命題全体の真偽価値は影響を受けない。このことから、従属節が引用文である場合は真偽価値を指示していないと考えられる。したがって、このような従属節の指示対象が意味内容 (*pensée*) であると考えても、問題はおこらない。

《On vérifierait que, dans les cas qui nous occupent, la dénotation de la subordonnée est effectivement la pensée exprimée, au fait que la vérité ou fausseté de la pensée est sans importance pour la vérité de l'ensemble.》²⁾

ただし、このような従属節において、同じ対象を指示するからといって、従属節の一部の語句を別の語句におきかえることはできない。おきかえられるとしたら、引用前のもとの語句を指すような語句でなければならない。たとえば先の《*Jean croit que*》の命題において、ほんとうは中国の人だからといって、《*un taïtien*》を《*un chinois*》にかえることはできない。どちらの表現も同じ人物を指すとはいえ、《*un chinois*》では *Jean* の意図する意味内容を指し示すことはできないからである。

しかしながら、従属節が引用文の場合、指示対象は真偽価値ではないが、このことから命題の指示対象は真偽価値ではないと結論してしまうのは、いきすぎだとフレゲは言う。なぜなら、同じ理屈で《*étoile du matin*》という語句の指示対象は *Vénus* ではない、というのも、必ずしもいつも《*étoile du matin*》のかわりに《*Vénus*》とは言えないからだという主張が成立してしまうからだ。ゆえに、命題の指示対象は、必ずしも真偽価値ではなく、また、引用語句として用いられる場合、《*étoile du matin*》という表現の指示対象は、必ずしも *Vénus* ではないというのが正しい結論だとフレゲは述べている。

上記の分析——従属節が引用文の場合、従属節の指示対象は真偽価値でなく、意味内容である——があてはまる型として、フレゲはこの他《*il semble*

que》, 《se réjouir》, 《déplorer》, 《approuver》, 《blâmer》, 《espérer》, 《craindre》, および 《ordonner》, 《prier》, 《interdire》が導く従属節, 《afin que》が導く副詞節, 《douter si》, 《ne par savoir ce que》, 《qui》, 《quoi》, 《où》, 《quand》, 《comment》, 《de quelle manière》等の導く間接疑問節をあげている。

②従属節中の語句が対象を指示するが、従属節は一つの完結した意味内容をもたない場合

次にフレゲは従属節中の語句が対象を指示するが、一つの完結した意味内容をもたないタイプの従属節について考察する。この場合、従属節は意味の点では一つの完結した内容をもたず、主節と一体となっではじめて一つの意味内容を構成し、従属節だけでは真偽価値を指示しない。フレゲのあげている次の例をみよう。

5) 《Celui qui a découvert la forme elliptique des orbites planétaires est mort dans la misère.》

もし従属節がそれだけで完結するような意味内容をもっているなら、独立節になおせるはずである。しかし、《celui qui》には、独立した意味がない。したがって、従属節の意味は完結しているとはいえず、その指示対象は真偽価値ではなく、Kepler という一個の人間である。

③形容詞節の場合

たとえば、《la racine carrée de 4 qui est inférieure á 0》のような表現は、《la racine carrée de 4 négative》といいかえることができる。すなわち qui 以下は、付加形容詞と同じような価値をもっている。ところで、これは racine carrée という概念を表わす表現に単数定冠詞を前置することにより、ある対象 (objet) を指示する表現がつくられた例である。フレゲの同じ著書におさめられている《Concept et objet》という論文によれば、定冠詞単数が用いられるのは、唯一の対象がある概念のもとに分類されるときである。とすれば、ここで定冠詞単数が用いられるのは racine carrée が概念ではなく、対象

としてとらえられている証拠となる。qui 以下で表わされているのは、その概念の個有の特徴である。ゆえに、形容詞と同じ価値をもつ形容詞節が、一つの完結した意味内容をもたず、真偽価値を指示していないのは明らかであろう。形容詞は主語がなく、それだけでは何について語られているのかが示されないため、一つの完結した意味内容をもたず、名詞と一体となっではじめて一つの完結した意味内容をもつのである。

フレゲは場所や時の状況補語節、条件節, qui, quoi, où, quand, partout où で始まる名詞節等についても同じ論拠に基づいて分析している。

- ④主節と従属節が、特定の対象を指示する名詞(“nom propre”)を共通要素として含んでおり、それぞれ完結した意味内容(pensée)をもっている場合

フレゲは次の例をあげている。

- 6) 《Napoléon qui reconnut le danger menaçant son flanc droit, conduisit lui-même ses gardes contre la position ennemie.》

この命題には次の二つの完結した意味内容が表わされている。

1. Napoléon reconnut le danger menaçant son flanc droit.
2. Napoléon conduisit lui-même ses gardes contre la position ennemie.

真偽価値についてはどうだろうか。命題全体が真とされるときは、主節も従属節も真とみなされる。すなわち、従属節は真偽価値を指示しているわけである。したがって、真偽価値が同じなら、従属節を別の命題に入れかえることができる。このような場合、一つの命題の形をとらなくてもかまわないとすれば、この二つの節を et でつながれた二つの独立した命題になおすことができる。

要するに、こういう場合は、主節も従属節も一個の独立した命題と同じく、それぞれ一つの完結した意味内容を持ち、それぞれ真偽価値を指示するというのがフレゲの主張するところである。

- ⑤条件節が特定の対象を指示する名詞を含んでおり、一つの完結した意味内容をもっている場合

次例はフレゲのあげている例である。

7) 《Si maintenant le soleil est déjà levé, le ciel est très nuageux》

この命題は、特定の時（現在）と場所で発話された言表だと考えられる。したがって、条件節の真偽価値と帰結節の真偽価値は相関関係にあるはずである。すなわち、一方が真で、他方が偽ということとはありえない。主節と従節の真偽価値のみが問題になり、全体の真偽価値は主節、従節の真偽価値に左右されないで、真偽価値が同じなら、主節あるいは従属節を別の節におきかえることができる。

以上の分析から、たいていの場合、従属節は一つの完結した意味内容を表わさず、その一部だけを表わすことがわかった（①～③）。この場合は、従属節の指示対象は真偽価値ではない。その理由は、i) 従属節中の語句が引用語句を指示していて、一つの完結した意味を指示しない（①）、あるいは ii) 従属節が不定要素を含んでいるため、完結しておらず、主節と一体になってはじめて一つのまとまりをもった意味内容を表わす（②、③）からであるとフレゲは述べている。

しかし、これはあらゆる従属節についていえるわけではなく、従属節が一つの完結した意味内容を表わす場合もある（④、⑤）。この場合は、命題全体の真偽価値をかえることなく、文法規則に違反しない限りにおいて、同じ真偽価値をもった別の節にかえることができる。

⑥従属節が一つの完結した意味内容以上のことを表わす場合

フレゲによれば、以上の分析は、あらゆる従属節にあてはまるわけではない。その理由をフレゲは次のように述べている。

たいていの場合、話者が言い表わす中心的な意味の他に、心理的法則に従って——言葉で表わさなくても——聞き手は付随的な意味を付け加える。多くの場合、命題を解釈するときは、この点を考慮しなければならない。しかし、場合によっては、この付随的な意味内容が命題の意味に含まれているのか、それとも単に付随しているだけなのか、不明瞭な場合があるとフレゲは言う。フレゲのあげた例をみよう。

- 8) 《Napoléon qui reconnut le danger menaçant son flanc droit, conduisit lui-même ses gardes contre la position ennemie》

この命題は、先に④で扱った二つの意味内意（1. Napoléon reconnut le danger menaçant son flanc droit, 2. Napoléon conduisit lui-même ses gardes contre la position ennemie）だけが表わされていると解釈することもできれば、1が2の理由を表わす意味内容が字面の意味以上の意味内容を表わしていると解釈できる場合、命題の真偽価値はどうなるのだろうか。

今仮に、Napoléon が危険を察知する前に移動を開始していたとしよう。この場合、命題は偽と考えるべきだろうか。あるいは真と考えるべきだろうか。真だとすれば、1が2の理由だということは、命題の意味内容に含まれていないと考えねばならない。逆に偽だとすれば、1が2の理由であることも表わされていることになる。つまり、命題の指示する真偽価値は、意味内容の解釈の仕方によって変わる。

このように、従属節の意味内容が字面の意味以上のことを表わすと解釈できる場合は、その解釈の仕方によっては必ずしも真偽価値が同じだからといって、従属節を別の従属節でおきかえられるとは限らない。たとえば、

- 9) 《Napoléon reconnut le danger menaçant son flanc droit》

を

- 10) 《Napoléon avait plus de 45 ans》

という命題でおきかえたとしたら、真偽値は同じでも、意味内容が違ってしまう。

以上のことから、命題が字面の意味以上の意味内容を表わしていると解釈できる場合、命題の指示する真偽値は、意味内容の解釈の仕方によって変わり、真偽値が同じだからといって、別の節でおきかえられるとは限らないことがわかる。

さらにフレゲは、付随的な意味内容が必ず付け加わる場合を考察する。

- 11) 《Bebel s'imaginait que le retour de l'Alsace-Lorraine à la France pourrait affaiblir son désir de vengeance》

この命題に表わされているのは次の二つの意味内容である。

1. Bebel croit que le retour de l'Alsace-Lorraine à la France affaiblirait son désir de vengeance
2. le retour de l'Alsace-Lorraine à la France ne peut pas affaiblir son désir de vengeance

1のように que 以下を引用文と解釈すると、命題中の語句は、もとの引用文の語句を指示することになるが、2のように解釈すると、同じ語句が現実の対象を指示することになる。つまり、もとの命題の従属節は二つの解釈が可能である。1のように解釈すれば、従属節は引用前のもとの命題の意味内容を指示し、2のように解釈すれば、真偽値を指示する。《savoir》, 《reconnaitre》, 《il est connu》を含む命題もこのような二重の解釈が可能である。

続いてフレゲは、因果節の場合も、主節と従属節がそれぞれ単独に表わす意味内容以上のことを命題全体が表わすことを指摘する。フレゲは次の命題を以下のように分析する。

- 12) 《Parce que la glace a un poids spécifique inférieur à celui de l'eau, elle flotte sur l'eau》

ここに表わされている意味内容は3つある。

1. la glace a un poids spécifique inférieur à celui de l'eau,
2. si quelque chose a un poids spécifique inférieur à celui de l'eau, cela flotte sur l'eau,
3. la glace flotte sur l'eau.

フレゲによれば、最低限3はなくても、1と2だけで命題の意味を表わすことができるが、1と3あるいは2と3だけではできない。つまり、従属節には1と2の一部が表わされていることがわかる。ゆえに、真偽値値が同じだからといって、従属節を別の従属節にかえることはできないのである。なぜなら、2も同時に変化をうけてしまうからであり、その結果2つの真偽値値に影響するかもしれないからである。

以上の三つの例から、従属節がそれだけで完結した一つの意味内容以上のことを表わす場合、従属節は真偽値値を指示するが、真偽値値が同じだからといって、別の従属節におきかえられるとは限らないことがわかる。

II-3. 従属節に関する結論

これまで従属節についてのフレゲの分析をみてきたが、フレゲは以上から次のような結論を導いている。

真偽値値が同じでも、ある従属節を別の命題でおきかえると、必ずしも命題全体の真偽値値はもとのままである。その理由は以下のとおりである。

1. 従属節は、一つの完結した意味内容の一部しか表わさない場合、真偽値値を指示しない。

2. 従属節は、一つの完結した意味内容もしくはそれ以上のことを表わす場合、真偽値値を指示する。ただし、真偽値値が同じだからといって、別の従属節におきかえられるとは限らない。

お わ り に

以上の考察から、命題を字面の意味からのみ分析するのでは不十分であり、言葉と現実との接点として、指示の機能を考慮する必要があることが明らかになった。また、指示対象をどのように想定することができるか、可能性の一つもとらえることができた。真偽価値という観点からすべての命題の分析が可能かどうかは疑問であるが、意味の面からのみの分析が不十分であることを指摘し、問題化したフレイゲの功績は、言語学、哲学史上非常に重要である。

注

- (1) Frege, G., 《Sens et dénotation》, *Ecrits logiques et philosophiques*, Seil, 1971, p. 110
- (2) Ibid., p. 113